

商学部創立50周年記念に向けて

専修大学名誉教授
第8代商学部長
小島 崇弘

この度、平成27年に専修大学商学部が創立50周年を迎えられるとのこと、過去に33年間勤務致しました者として、御祝い申し上げます。

さて記念事業実行委員会の御依頼に基づき、私が商学部長を務めました平成9年9月より平成11年8月までの活動を中心に商学部の教育改革について思い出を述べさせていただきます。第1番目は商学部に情報処理教育の導入、第2番目は入試制度改革としてセンター試験の導入、そして最後はカリキュラム改革と Semester 制の採用です。

情報処理教育の導入

私にとって最も印象的なのは、昭和60年ころと思いますが、現在はネットワーク情報学部に移られた中村友保先生、江原淳先生と現商学部長の佐々木重人先生の4名で商学部の学生諸君にコンピュータ言語である FORTRAN と COBOL の教育を開始しました。FORTRAN と COBOL と聞いても御存じない方が多いかもしれませんが、前者は技術計算用コンピュータ用プログラム言語、後者は事務計算用のコンピュータ用プログラム言語です。後者については「2000年」問題で脚光を浴びたので御存じの方も多いかもかもしれません。当時コンピュータ言語教育は商学部のカリキュラムにはなく、電子計算機室（情報科学センターの前身）に設置された大型コンピュータ（メインフレームは当時そう言われていました）に時間的空きがなく、仕方なく夏休みに2週間連続してコンピュータ実習の授業を行いました。中村・江原先生が FORTRAN を、小島と佐々木先生が COBOL を担当しました。夏休みの暑い中を朝8時半頃に女子学生と競争です。向ヶ丘遊園の駅から1号館の電子計算機室まで競争して「定年坂」または「地獄坂」と呼ばれていた急な坂道を駆け上がったのは最も印象的でした。

その後は情報処理教育として正規のカリキュラムに組み込まれ、高萩先生や高橋（裕）先生など若手に引き継がれました。

一方、専修大学の情報処理教育環境も大きく変化しました。初期の「電子計算機」は大型計算機（メインフレーム）とは呼ばれていましたが、実際にレンタル料は巨額で、性能は初期のパソコン並み、本体の専有面積は1教室分ぐらいあり、生田新1号館2階に設置されていました。情報処理教育環境に画期的な変化が見られたのは、平成10年4月に生田9号館3階へ情報科学センターが生田新1号館から移転したことです。

この移転には多くの困難がありました。実は最初から生田9号館に入る組織に某専務理事の意向で情報科学センターは含まれていませんでした、そのため情報科学センター代表は生田9号館建設の検討委員会に呼ばれていませんでした。しかし偶然（？）商学部の代表に情報科学センター長が委員に選ばれ、生田9号館3階の争奪戦が図書館との間で繰り広げられました。法学部代表の某老教授が「大学は減びても図書館は残

る」と発言されたのにはびっくりしましたが、若い他学部の代表がこれからはコンピュータの時代だと情報科学センターの生田9号館への設置することを主張してくれ、生田9号館3階の図書館の壁の外側が情報科学センターの領域となりました。しかも新1号館はひき続き情報科学センターの端末室が残りしました。最初のころは少々広すぎて、メインフレームを入れるコンピュータ室は2室確保しました。1室には現在稼働中のメインフレームが設置され、他の1室には入れ替えの際に新しいメインフレームを設置する予定でした。他にセンター長室、センター員室や情報処理機器の展示場等を計画していましたが、その後メインフレームは廃止され、あっという間に用意していたコンピュータ室は数多くのサーバー機器でいっぱいになり、センター長室や「情報処理機器の展示場等」は夢となりました。平成10年の4月のクライアント・サーバーシステムの導入時にはクライアント総台数は1,100台に達しました。

その後大学教育におけるネットワーク情報システムの必要性が増し、平成16年4月から22年3月にはeキャンパス推進委員会が設置され、全学的なeキャンパス構想が検討されました。平成16年には生田キャンパスと神田キャンパスが本格的にクライアント・サーバーシステムで接続され、LANに接続されているクライアント数は1,500台に達しています。さらに、平成21年9月には生田10号館が完成し、生田駅から徒歩で10号館に入ると1階に多くの端末が設置されて、学生諸君が予約なしに、空いていれば自由に端末を操作している様子は壮観でした。

入試制度改革としてセンター試験の導入

専修大学商学部商業学科に「大学入試センター試験」が導入されたのは平成11年度からです。この年「大学入試センター試験」を導入したのは経営学部経営学科と情報管理学科そして商学部商業学科です、会計学科は簿記が入学試験科目に無いため見送りました。

「大学入試センター試験」導入の理由の一つは、当時神奈川県川崎市付近で「大学入試センター試験会場」として受験者を大量に受け入れる大きな大学がなかったことと、専修大学一般入試の志願者が大幅に減少してきたことにありました。

前者については生田校舎で900名の受験者を受け入れました。一般入試では大教室が使われましたが「大学入試センター試験」では40人2室、45人2室、50人1室65人4室70人6室で合計900人15室および予備室1室の体制で、監督も教員28名、職員18名の体制で実施されました。商学部は8名の教員が割り当てられましたが、国立大学で「大学入試センター試験」を経験された若手の先生方を中心にお願いしました。今でも申し訳ないことをしたと反省しています。

もう一つの理由は、一般入試の受験者の大幅な減少です。商学部と経営学部および専修大学全体の受験生の応募状況は次の通りです。

最も受験生の多かった年を100とすると、

	商学部	経営学部	専修大学全体
H2 (1990)	82	100	97
H3	67	99	100
H4	100	77	91
H5	69	76	77
H6	57	61	77
H7	51	57	81
H8	86	59	83
H9	43	45	71
H10 (1998)	46	44	60

となっており、商学部、経営学部は何らかの対策が必要とされました。

一方、幸いにも「大学入試センター試験」を導入することで、法人は試験会場として教室と監督者を提供することとなり、そのための経費がセンターから提供されます。さらに、「大学入試センター試験制度を利用して専修大学を受験する受験者」については、受験生の成績がセンター試験終了後コンピュータ用のデータとして専修大学に提供され、コンピュータで合否を判定するだけで、「入学試験」のためのコストはほとんど不要でした。かつ「大学入試センター試験制度」を利用して専修大学を受験する受験生の受験料収入が法人に入ることでした。

理事会で「大学入試センター試験」を利用した受験生の受験料を決定する際に、一般入試の受験料と同じ(3万5千円)にと主張する法人理事と、安くすべきだとする教員理事とで論争があり、結局は安く決定された記憶があります。その結果、平成11年度「大学入試センター試験」は平成11年1月16日・17日に実施され、次のような結果になりました。

平成11年度商学部商業学科「大学入試センター試験」結果

募集定員	35名
受験者数	1474名
合格者数	275名
合格者内訳	
現役	130名
浪人	145名
男女別	
男子	216名
女子	59名

ちなみに「大学入試センター試験」結果発表は2月11日、手続き締め切り2月19日でしたが、手続き者見込み者35名の手続き結果については資料が見つかりませんでした。

その後「大学入試センター試験」は他学部でも採用され現在に至っています。

カリキュラム改革と Semester 制

商学部のカリキュラム改革と Semester 制の導入は、「大学入試センター試験」導入の項でも記したように、商学部もしくは専修大学全体への受験生の大幅な減少を受け、大幅なカリキュラム改革、学科名の変更をも含めさらに授業形態の抜本的改革が求められました。

その結果、学部改革検討委員会が次のメンバーを委員として設置されました。

小島崇弘・大西勝明・川村晃正・江原淳・関根孝・上田和勇・小藤康夫

小口登良・三友仁志・中村友保・内野明・鳥羽至英・柳裕治

以上13名ですが、その後、小口登良先生は逝去、中村友保、江原淳の2名はネットワーク情報学部へ、さらに鳥羽至英、三友仁志の両名は他大学へ転出しています。

学部改革検討委員会は、第1回が平成10年3月27日から7月7日までの間に10回開催され、平成10年7月14日の第7回教授会において「商学部改革について」が示されました。主な内容は以下の通りです。

1. 商業学科は「流通・マーケティングコース」「金融・証券・保険コース」「産業システムコース」の3コース制を採用し各々定員200名でスタートすること
2. 教育効果を考慮し、3段階の専門科目群として

「教養科目28単位」

「専門科目群学科共通専門科目群88単位, そのうちコース専門科目群40単位を含む」

「卒業要件単位12単位」合計128単位とする

3. セメスター制の採用
4. 商業学科の名称変更は別途検討する

その結果セメスター制は平成12年4月入学の1年生から開始され、商業学科は学科名も「マーケティング学科」に変更され現在に至っています。セメスター制の採用による混乱としては、新入生は週2回の授業となり半期で成績が付き、一方在校生は週1回の授業で半期または通年の授業となり、セメスター制導入の初期には先生方には週2回の半期授業と通年の授業をミックスして担当されました。

その後はセメスター制が軌道に乗ると、海外留学の予定の先生は自分の担当科目を前期に集中して授業を担当し、後期には海外留学に赴ける等の便利さも備わりましたし、従来は自分の代わりに担当してくれる非常勤講師を探す手間がなくなりました。

専修大学の全体のセメスター制導入についての最大の貢献者は大西教授で、学部長時代に大変努力されています。ご苦労様でした。